

兵庫県内の芭蕉句碑等を訪ねて

溝 口 繁 美

はじめに

インターネットで「芭蕉句碑」と検索すると、「芭蕉句碑全国総覧－S.Tanaka's homepage」というページが真っ先に出てくる。閲覧すると、最初のページに目次と並んで全国の都道府県名が表示され、それをクリックすると、その都道府県内各地の句碑等が確認できるようになっていて驚く。「兵庫県」をクリックすれば、これまた兵庫県内各地の芭蕉句碑などが紹介されるのである。

兵庫県はご承知のように、須磨・明石が芭蕉の「笈の小文」の舞台であり、彼の足跡が残されているのは当然と言えれば当然なのだが、このリストの中には、そこだけではなく、遠く但馬や淡路、西播の地のものまでが入っている。

この著者自身が抱いた疑問でもあるのだが、どうしてそうしたものが、芭蕉と縁もゆかりもなさそうに思われるところにまで、何代にも渡って残され、保存されてきたのだろうか。勿論、全てのものを解明するというわけにはいかないだろうが、今回出来る限りリストにある句碑等を実際に尋ね、その上でどういう経緯でそれらが建てられ、保存されてきたのかを私なりに明らかにすることによって、俳人芭蕉が、世の人達にどう考えられ評価され、どのように受け入れられて、芭蕉その人と世界がこれまで継承されて来たのか少しでも分かる

のではないかと考えた。そうすることによって、偉大な俳人芭蕉に少しでも近づけることが出来ればと思っている。

目次

はじめに

第1章 須磨・明石の巻

第1節 芭蕉の句と句碑の場所

第2節 芭蕉の行程と現存する句碑の関係

第3節 句碑等の調査結果

第4節 設立経緯による句碑等の分類

第5節 関係資料

第2章 淡路の巻

第1節 芭蕉の句と句碑の場所

第2節 句碑等の調査結果

第3節 設立経緯による句碑等の分類

第4節 関係資料

第3章 まとめ

第1節 その他の兵庫県における芭蕉句碑

第2節 今後の研究について

おわりに

第1章 須磨・明石の巻

第1節 芭蕉の句と句碑の場所

先の「芭蕉句碑全国総覧」によると、兵庫県の須磨・明石では、次の10の句碑等が紹介されている。

1 花咲いて七日鶴見るふもとかな

神戸市東灘区魚崎町 加茂神社

- 2 なてしこにかゝる涙や楠の露
神戸市中央区楠町 広巖寺（楠寺）
- 3 蝸牛角ふりわけよ須磨明石 芭蕉翁
神戸市須磨区西須磨 須磨浦公園鉢伏山登山口
- 4 見渡せはなかむれは見れは須磨の秋
神戸市須磨区 現光寺前浜田氏宅
- 5 見渡せはなかむれは見れは須磨の秋 はせを
神戸市須磨区 藩茄山現光寺
- 6 とも まつ とみえすもみちに一人かな 芭蕉 ☆誤伝
神戸市須磨区禅昌寺町 禅昌寺
- 7 須磨寺やふかぬ笛きく木下やみ
神戸市須磨区須磨寺町 真言宗須磨寺派上野山福祥寺（須磨寺）
- 8 蛸壺やはかなき夢を夏の月 はせを
明石市人丸町 柿本神社
- 9 ほとゝきすきえゆくかたやしまひとつ
明石市人丸町 天文科学館
- 10 かたつむり角ふりわけよ須磨明石
明石市中崎 明石市民会館

第2節 芭蕉の行程と現存する句碑の関係

芭蕉は、1688年（元禄元年）四月十九日、尼崎から船に乗って兵庫の港に到着。その夜はそこに宿泊した。翌二十日、経の島・わだのみ崎・わだの笠松・内裏やしき・本間が遠箭を射た跡などを廻り、行平の松風・村雨の舊跡、さつまの守の六彌太と勝負した舊跡を過ぎ、西須磨に入って「幾夜ね覚ぬ」と詠まれた関屋の跡をたどり、一ノ谷逆落し・鐘懸松を見て、鉄拐山に登っている。その後、山を下り麓にある敦盛の石塔を見て涙を流した。海岸の風景を眺めながら明石まで行き、それから須磨に戻って泊っている。二十一日には布引の瀧に登り、山崎道を通して京に向かい、途中、能因のつか・

金龍寺の入相の鐘を見る。山崎宗鑑屋舗を訪ね、「有難きすがた拝まんかきつばた」という句を詠んで、四月二十三日京へ入っている。

こうした行程からすると、紹介された句碑の中で、芭蕉その人との関連を見るとすれば、1、6以外の句碑が彼の足跡と関連する可能性があることになる。

第3節 句碑等の調査結果

「芭蕉句碑全国総覧」に紹介された、兵庫県の須磨・明石の10の句碑等の内、1番の加茂神社、4番の浜田氏宅の碑は、加茂神社そのもの、浜田氏のお宅自体を見つけることが出来ず、確認することが出来なかった。ここでは、残りの8か所の句碑等について、報告することとする。

1 神戸市東灘区魚崎町 加茂神社について

現在、この加茂神社については、その存在そのものが、魚崎町では確認できなくなっている。地元では、魚崎八幡神社と横屋八幡神社が良く知られ、現在でもしっかり守られているが、加茂神社については、地元の人に聞いても知らないとの返事が返ってくる。また、芭蕉の行程からすると、そもそも芭蕉が立ち寄ったとは考えにくいことから、仮に神社に句碑があったとしても、芭蕉そのものとの関係は薄いと考えられる。

2 神戸市中央区楠町 広巖寺（楠寺）について

JR神戸駅を出て北側に行くと、楠木正成を祀る湊川神社があり、その北側の小高くなった所が大倉山と呼ばれ、公園になっているが、周辺には中央体育館、文化ホール、市立図書館等が集まっている。文化ホールの東側の小道を図書館に向かって登って行くと、道路を渡った向こう側に広巖寺（楠寺）が見える。道路に面して会館の建物と墓所があり、墓所を見下ろす大きな石塔の横にこの句碑が立てられている。事務所で由来等を尋ねてみたが、能職以外では分からないということであった。訪れたときは、忙しいらしくこちらも面会は遠慮し、次の機会を待つこととした。

3 神戸市須磨区西須磨 須磨浦公園鉢伏山登山口について

山陽電鉄の須磨浦公園駅を降りて外へ出て右側に進むと、山に向かって道

が続いており、その先にある橋を渡って道沿いに上がっていくと、海側に向かかってちょっとした展望台のような場所が広がっており、その片隅に「蝸牛角ふりわけよ」の句碑がある。これは、もと境川（須磨と明石の境を流れる）の辺にあったものが喪失し、昭和11年旗振山山頂に「羅月吟社」が建立したものが、今の地に移されたらしい。字は寺崎方堂（「正風」主宰）。此処には、他にも与謝蕪村句碑、正岡子規・高浜虚子師弟句碑などがあり、観光客用に、当地ゆかりの俳人を集めて整備された中に位置づけられたものと

5 言 神戸市須磨区 藩茄山現光寺について

JR須磨駅あるいは山陽電鉄須磨駅から須磨寺に向かって歩いていき、道路が三叉路になっている所を北側に上って、山陽電鉄の高架をくぐると、現光寺とその石段下にある大きな石碑が目につく。その階段を上り、境内に入ると芭蕉句碑がある。現光寺は、「源氏物語」の主人公光源氏の住居跡と伝えられ、もとは「源氏寺」ともいわれていた。境内には松尾芭蕉の句碑や正岡子規の句碑もある。寺の近くに「藩架」とか「ヤグラ」という字名が残されていることより、古代の須磨の関跡だともいわれる。この句は、延宝6年（1678年）松尾芭蕉35才の作で、世に3段切の名句といわれ、句碑については、昭和12年2月西須磨協議会により建てられた。高さ約3メートル。

6 神戸市須磨区禅昌寺町 禅昌寺について

禅昌寺は、神戸市須磨区禅昌寺町にある臨済宗南禅寺派の寺院。山号は神撫山。本尊は十二面観音。後光厳天皇の勅令により建立された西摂有数の寺院で、延文年間（1356年－1361年）月菴宗光の開山により創建された寺。足利幕府は寺領36石を寄進し、織田信長・荒木村重より諸役免除の沙汰を受けた。天正3年（1580年）豊臣秀吉の三木城・別所長治攻めの兵火で焼失し、後に桃山御殿から豊国亭を移して方丈として再興。この禅昌寺に芭蕉が来たかどうか不詳だが、句碑に刻まれているのは、楓寺としての風情をよく表している句である。誰が建てたのか、いつごろのものか今のところわからない。リストに「誤伝」とあるが、どういう根拠なのかは不明。

7 神戸市須磨区須磨寺町 真言宗須磨寺派上野山福祥寺（須磨寺）について

須磨寺の正式名は、上野山福祥寺（じょうやさんふくしょうじ）であるが、古くから「須磨寺」の通称で親しまれてきた。平敦盛遺愛の青葉の笛や弁慶の鐘、さらに敦盛首塚や義経腰掛の松など、多数の重宝や史跡があり「源平ゆかりの古刹」として全国的に知られている。古来より源平の浪漫を偲んで訪れる文人墨客も数多く、広い境内のあちこちに句碑・歌碑が点在している。この句は、1688年4月、松尾芭蕉が源平古戦場を訪ねて、平敦盛を偲んで詠んだ句。昭和43年6月佐野千遊が建て、字を橋間石が書いている。

8 明石市人丸町 柿本神社について

山陽電鉄の人丸前駅で降りて山側へ坂道を登って行くと、人丸山の高台に神社がある。この神社は、柿本大明神とも称される柿本人麻呂朝臣を祀る。祭神は歌聖と仰がれることから歌道の神としての信仰を集め、そこから学問文芸の神としても崇められる。また「人麿（ひとまる）」を「人生まる（ひとうまる）」と解し安産の神として、江戸時代からは「火止まる（ひとまる）」と解し火防の神としての信仰もある。他にも「明石」と「開かし」を掛詞として眼病治癒の効験があるとされている。嘉暦2年（1327年）に著された『人丸縁起』によると本地仏は十一面観音で、その像は旧別当寺として隣接する月照寺に祀られている。

その神社の山門前、天文科学館のドームの屋根と瀬戸内海、それを跨ぐ明石海峡大橋がくっきりと見える所に、この句碑が立てられている。句碑は、芭蕉七十五回忌に当たる明和五年（1768年）、加古川の俳人、松岡山季（星羅）が建立し、その後崩壊により二度再建された。現在、明石俳句会がその経緯由来と句を綺麗な銘板にして設置し、句碑の横に立ててくれているので、どういう句なのか良く分かるようになっている。ただ、柿本神社のホームページを見ると、「境内の名所」というコーナーもあるのだが、残念ながらその中には入っておらず、句碑そのものも境内の中には置かれていないことから、神社の側の判断としては、それ程重要視してはいないのかと思われる。

9 明石市人丸町 天文科学館について

この句碑は、芭蕉の七十五回忌にあたる明和五年（1768）青蘿が創建、崩

壊のため玉屑が復興さらに魯十が再建した。それを引き継いだ「明石俳句会」が現在の句碑を立てている。

10 明石市中崎 明石市民会館について

この句碑は、台座にある説明を読むと、1979年2月に明石人丸ライオンズクラブ創立10周年を記念して建てたものだとある。クラブ創立を祝うものとしては色々候補があったものと思われるが、芭蕉が明石を訪れたこと、またこうした著名な句を、明石を題材として創作してくれたことを喜ぶ人が会員にいたことで、この句碑建立となったのであろう。

第4節 設立経緯による句碑等の分類

以上、現在須磨・明石には8か所の句碑等が確認できるが、その成立の経緯は様々である。芭蕉は1688年、実際に須磨・明石を訪れ、これらの句を残している。ただ、誰がこれらの碑を建て、それがどのような動機によるものなのかは千差万別である。一応の区別をつけるとするなら、建立したのが、個人か団体か、それも芭蕉や俳諧にゆかりがあるのか、全く無縁なのかで分けることが可能であろう。

区分		句碑番号
個人	所縁有り	7、8、9
	所縁無し	
団体	所縁有り	3
	所縁無し	5、10
不明	不明	2、6

句碑設立に関しては、個人の場合は俳諧に関わっており、芭蕉の弟子に繋がる人との関係などから句碑を設立しており、団体の場合は俳諧や芭蕉に縁がなくても、芭蕉の人と作品を評価し、それを団体の記念に当たる行事等に際して設立していることが分かる。

第5節 関係資料

「笈の小文」

1687年（貞享4年）、芭蕉44歳。この年8月に「鹿島詣」をした後、10月から翌年の3月まで「笈の小文」（おいのこぶみ）の旅に出る。10月江戸を出発、鳴海、勢田から保美（ほび）村の門人杜国（とこく）をたずね、郷里で越年。伊勢に詣で杜国を同道して吉野の花を見、高野山、和歌浦、奈良、大坂、須磨、明石を翌年4月まで旅した紀行。8月には信濃路「更科紀行」の旅へと続いている。自己の半生を回顧し風雅観を述べた一文、紀行観を述べた一文などもあり、芭蕉俳諧を考えるうえで重要な作品。一面、句と文との統一を欠く面もあり、未定稿との説もある。

須磨

月はあれど留守のやう也須磨の夏

月見ても物たらずや須磨の夏

卯月中比の空も朧に残りて、はかなきみじか夜の月もいとゞ艶なるに、山はわか葉にくろみかゝりて、ほとゞぎす鳴出づべきしのゞめも、海のかたよりしらみそめたるに、上野とおぼしき所は、麥の穂浪あからみあひて、漁人の軒ちかき芥子の花のたえだえに見渡さる。

海士の顔先みらるゝやけしの花

東須磨・西須磨・濱須磨と三所にわかれて、あながちに何わざするともみえず。「藻塩たれつゝ」など歌にもきこへ侍るも、今はかゝるわざするなども見えず。きすごといふうをを網して、眞砂の上にほしちらしけるを、からすの飛来りてつかみ去ル。是をにくみて、弓をもてをどすぞ海士のわざとも見えず。若古戦場の名残をとゞめて、かゝる事をなすにやと、いとゞ罪ふかく、猶むかしの戀しきまゝに、てつかひが峯ににのぼらんとする。導きする子のくるしがりて、とかくいひまぎらはするを、さまざまにすかして、「麓の茶店にて物くらはすべき」など云て、わりなき躰に見えたり。かれは十六と云けん里の童子よりは四つばかりもをとをとるべきを、数百丈の先達として、羊腸險阻の岩根をはひのぼれば、すべり落ぬべきことあまたたびなりけるを、つゝじ・根ざ

さにとりつき、息をきらし、汗をひたして、漸雲門に入こそ、心もとなき導師のちからなりけらし。

須磨のあまの矢先に鳴か郭公
ほとゝぎす消行方や鳥一つ
須磨寺やふかぬ笛きく木下やみ
明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

かゝる所の穉なりけるとかや。此浦の實は秋をむねとするなるべし。かなしさ、さびしさいはむかたなく、秋なりせば、いさゝか心のはしをもちひ出べき物と思ふぞ、我心匠の拙なきをしらぬに似たり。淡路嶋手にとるやうに見えて、すま・あかしの海左右にわかる。呉楚東南の詠もかゝる所にや。物しれる人の見侍らば、さまざまの境にもおもひなぞらふるべし。

又後の方に山を隔てゝ、田井の畑といふ所、松風村雨ふるさとといへり。尾上つゞき、丹波路へかよふ道あり。鉢伏のぞき・逆落など、おそろしき名のみ残て、鐘懸松より見下に、一ノ谷内裏やしき、めの下に見ゆ。其代のみだれ、其時のさはぎ、さながら心にうかび、佛につどひて、二匱のあま君、皇子を抱奉り、女院の御裳に御足もたれ、船やかたにまろび入らせ給ふ御有さま、内侍・局・女孺・曹子のたぐひ、さまざまの御調度もてあつかひ、琵琶・琴など、しとね・ふとんにくるみて船中に投入、供御はこぼれて、うろくづの餌となり、櫂筒はみだれて、あまの捨草となりつゝ、千歳のかなしび此浦にとゞまり、素波の音にさへ愁多く侍るぞや。

(『芭蕉文集』日本古典文学大系 岩波書店より)

惣七(猿雖)宛書簡(元禄元年四月廿五日附)

十九日あまが崎出船。兵庫ニ夜泊。相國入道の心をつくされたる經の島・わだのみ崎・わだの笠松・内裏やしき・本間が遠箭を射て名をほこりたる跡などきゝて、行平の松風・村雨の舊跡、さつまの守の六彌太と勝負したまふ舊跡かなしげに過て、西須磨に入て幾夜ね覚ぬとかや 関屋の跡も心にとまり、一ノ谷逆落し・鐘懸松、義經の武功おどろかれて、てつかひが峯に昇れば、須磨・あ

須磨・明石の芭蕉句碑（写真）



須明石市民会館



柿本神社



天文科学館前



須磨寺



須磨浦公園



現光寺



楠寺



禅昌寺

かし左右にわかれ、あはぢ嶋・丹波山、かの海士が古里田井の畑村など、めの下に見おろして、皇の皇居はすまの上のと云る其代のありさま心に移りて、女院おひかへて舟にうつして、皇を二位どのの御袖によこ抱ニいだき奉りて、寶劍・内侍所あはただしくはこび入、或は下//の女官はくし箱・油つぼをかへて、指ぐし・根巻を落しながら、緋の袴にけつまづき、臥轉びたるらん面影、さすがに見るこへちあはれなる中に、敦盛の石塔に泪をとゞめ兼候。磯近き道

のはた、松風のさびしき陰に物古たるありさま、生年拾六歳にして戦場にのぞみ、熊谷に組ていかめしき名を残し侍る。其日のあはれ、其時のかなしさ、生死事大無常迅速、君わするゝ事なかれ。此一言梅軒子へも傳へ度候。須磨寺のさびしさ 口を閉たるばかりニ候。蝉折・こま笛、料足十疋見るまでもなし。此海見たらんこそ物にはかへられじと、あかしよりすまに歸りて泊る。

廿一日布引の瀧に登る。山崎道にかゝりて、能因のつか・金龍寺の入相の鐘を見る。花ぞ散けるといひし櫻もわか葉に見えて又おかしく、山崎宗鑑屋舗、近衛どのゝ宗かんがすがたを見れば餓鬼つばたと遊しけるをおもひ出て

有難きすがた拝まんかきつばた

と心のうちに云て、卯月廿三日京へ入。

(『芭蕉文集』日本古典文学大系 岩波書店より)

第2章 淡路の巻

第1節 芭蕉の句と句碑の場所

淡路については、9つの句碑について紹介されている。芭蕉が淡路を訪れた形跡はなく、県内の他の地域と比べて面積的にも広くない淡路に、なぜこれほどの句碑があるのか。少し不思議ではある。

1 鞍つぼに小坊主のせて大根引

洲本市由良町内田217 内田神社

2 古池や蛙飛び込む水の音

洲本市由良町由良 生石神社(生石公園)

3 雲折々人を休むる月見かな

洲本市本町4-1-27 巖島神社

4 ものいへは唇寒し秋の風

洲本市栄町4-3-55 遍照院

5 蝸牛角ふりわけよ須磨明石

淡路市岩屋字明神799 石屋神社(石屋明神)

6 ひらひらとあくる扇や雲の峰

南あわじ市松帆樺田233 願海寺

7 明月や池をめぐりて夜もすがら

南あわじ市緑町広田 中山峠

8 花左可季山八必古の安作保良希（花さかり山は日頃のあさほらけ）

南あわじ市榎列上幡多857 大和国神社（二宮神社）

9 梅か香にのつと日の出る山路かな

南あわじ市賀集八幡734 賀集八幡宮

第2節 句碑等の調査結果

それぞれを尋ねてみた結果は以下のとおりである。2, 5, 7番については、句碑が確認できなかった。残念である。また別の機会に再度確かめたいと思っている。

1 洲本から国道28号線と別れて、海沿いに県道76号線を通って南下していくと、「内田」の小さな集落がある。その集落へ入る細い道に導かれて中に入ったすぐのところに、この神社がある。ただ、海を眺めながら県道に沿って進んでいくと、何の表示もないので、見過ごしていつてしまうような、小ぢんまりとした神社である。

しかし、嘗ての此処の住人渡邊月石は、非常な文化人で郷土史家としても有名である。宝暦四年（1754年）の生まれで、漢詩、和歌、俳句をよくした。内田神社には、天保五年（1834年）に、当時大根の産地として有名であった内田村にちなみ、芭蕉の句から、この「大根」の句を選び、自ら石に刻んで句碑とした。

2 現在は、公園として整備されており、展望台が設置されている。島内有数の梅の名所で、大阪湾と紀淡海峡が一望できる風光明媚な場所である。中には渡邊月石先生と刻まれた立派な碑が建てられている。園内には小さな社で出石神社が建てられていたりし、様々廻ってみたが、芭蕉句碑は確認できなかった。

- 3 洲本市内でも目立つ、大きく立派な神社である。弁天大通りという商店街の中にあり、広々とした境内は明るく開放的である。石の鳥居の左手に、武左衛門という名の狸の像があり、その後ろに句碑がある。どうして建てられたのか等の由来は不明。
- 4 洲本市中心部のイオンモールの近くではあるが、千種川沿いの静かな住宅街の一角にある。小ぢんまりとした境内を包むようにして建てられた白壁のそばに、石碑が建てられている。
- 5 神戸鳴門自動車道淡路インターの近く、国道28号線沿いにある大きな神社。石段を跨ぐ立派な長屋式門を通過して境内に入る。俳優の渡哲也が岩屋出身で、小学校の同級生が宮司を勤めているということで、階段を登り切ったところに名前を刻んだ石碑が立っている。しかし、残念ながら芭蕉の句碑については、見つけられなかった。
- 6 慶野松原から東へ向かい、松帆樺田地区に入る。10万分の一地図では、大体的見当はつくが、狭い集落の細い道をどう進んでいいのかわからない。何度も似たような所をぐるぐる回ってようやくたどり着く。地元ではお大師さんとして親しまれているようだが、訪れた日は人影もなく、社務所といったものもない、がらんとした寺であった。ただ、碑は、西淡町（現在は南あわじ市）の指定文化財となっており、その教育委員会名で詳しい説明が記された版が建てられている。淡路で俳諧に親しんでいた人たちが、加古川の師匠である松岡青蘿に依頼し、ここに芭蕉塚（扇塚）として句碑を建てたようである。
- 7 洲本から福良へ向かう国道28号線で、これを越えれば福良の町というところにある峠である。中山峠というバス停があり小さな祠はあるのだが、芭蕉句碑は見当たらず。
- 8 行く前にネットの写真で見たときは、ずいぶん立派な鳥居が立つ、大きな神社という風に見えたが、実際に行ってみると、あわじ縦貫道のすぐ横の丘の上にある、人がちょっと訪れそうもないような所であった。ナビに住所を入れるが、同じところをぐるぐるめぐらされるばかりで、一向行きつかない。

何回目かのチャレンジで、ようやくピルの下から上がっていく急な坂を見付け、ようやくたどり着くことが出来た。碑は、「花塚」として有名なようで、弘化五年（1848年）建立ということである。建立の目的等は不明。

- 9 淡路鳴門自動車道の西淡インターを降りて、県道31号線を南下すると、賀集という地区に入り、交差点の地名に八幡という名が付くようになり、八幡北の次八幡中の小さな川に架けられた小さな橋を渡ると、すぐ石の鳥居があり、その坂の先が賀集八幡である。参道の右手に駐車場があり、その北側、立派な仁王像二体の間をくぐると護国寺になっている。護国寺の左側の道を上った突き当りが賀集神社なのだが、それに向かって左側に小さな神社があり、これが摂社の八坂神社である。その八坂神社の手前左側をこれも小さな川が流れて、橋がかけられているが、その手前の5メートル近くあろうと思われる大きな石碑が、芭蕉句碑である。これについては、説明の石碑があり、明治三十五年春建立と書かれている。そして、説明に「元禄六年芭蕉五十歳の昇春、俳諧行脚の途中、この鎮守に詣で、一夜を明かした。宴梅の楚々と咲き薫るこの山麓に立ち、東を望み野田山の辺りに悠然と昇る朝日をとらえて、詠まれたのである。」と書かれている。芭蕉が最晩年に淡路に来たとは知らない。また、調べてみる必要がある。ちなみにこの説明の銘板を建てたのは平成二十二年春寅卯会還暦記念とある。また、八坂神社に置かれている大きな手水槽の手前の桜の木の下には、もう一つ小さな芭蕉句碑が置かれている。この碑には、「さまさまの事想ひ出す桜加奈」の芭蕉の句が刻まれていた。これも、裏に説明が刻まれているが、字がかすれて読めない。ただ、賀集神社境内には、至る所還暦記念の石碑が建てられているので、ひょっとすると、そのたぐいなのかもしれない。

- 10 (追加) リストにはなかったのだが、石屋神社の近く岩屋港から歩いて5分ほどのところに恵比須神社（岩楠神社）がある。西宮のエピスさんの本家との説があるようだが、十数メートルの岩壁の下の洞窟が目をつくる神社である。その赤い神社の鳥居の左手に「子規きえゆくかたや嶋ひとつ」という芭蕉句碑が建てられている。これは内田神社に芭蕉句碑を建てた、渡邊月石が

俳人仲間呼びかけ、天保三年（1832年）に建立したものであるそうだ。

第3節 設立経緯による句碑等の分類

以上、淡路には現在7か所の句碑等が確認できるが、これらを須磨明石に倣って分類すると、以下のとおりである。

区分		句碑番号
個人	所縁有り	1
	所縁無し	
団体	所縁有り	6, 9, 10
	所縁無し	
不明	不明	3, 4, 8

句碑設立に関しては、個人の場合は俳諧に関わっており、芭蕉の弟子に繋がる人との関係などから句碑を設立している。団体の場合は俳諧や芭蕉に縁がなくても、芭蕉の人と作品を評価し、それを団体の記念に当たる行事等に際して設立していることが分かる。

淡路には、俳諧に関心のある人が多く、伝統的にこれを高く評価しようとする傾向があったように感じられる。そうした文化的背景があって、このように多くの句碑が建てられ、保存されてきたのではないか。淡路の人々の俳諧や芭蕉に対する強い思いがあればこそ、真偽のほどはまだ明らかにできていないが、芭蕉自身が淡路を訪れたということ、はっきりと説明板に書き残すようなことにもなったのであろう。

地域全体としての文化的背景の在り方が、句碑の建て方や数、碑に刻まれる句の選択に現れることを、淡路島の芭蕉句碑が我々によく示していると思う。

第4節 関係資料

淡路の芭蕉句碑（写真）



遍照院



願海寺



大和国神社（二宮神社）



巖島神社



内田神社



恵比須神社
（岩楠神社）



賀集神社



賀集神社摂社
八坂神社

淡路の芭蕉句碑等関連地図



第3章 まとめ

第1節 その他の兵庫県における芭蕉句碑

その他県内の芭蕉句碑については、相生と但馬、そして西宮の三か所のものを取り上げたいと思う。

1 はるもや々けしきと々のふ月と梅

西宮市社家町 西宮神社（戎神社）

2 古池や蛙とひ込む水の音

相生市相生 古池（現長池公園）

3 はせを翁養塚

朝来市生野町 来迎時

4 はつざくらをりしも今日は能日也

豊岡市旧庁舎前広場

1番の碑は、鬼貫の「によっぼりと秋の空なる富士の山」という句とともに刻まれており、神社の大門近くの松林の中にある。西宮神社の略年表には天保14年（1843年）芭蕉と鬼貫の真蹟句碑、赤門北に建立とされており、石碑の裏には天保癸卯冬と書かれた後に、17名の句と名前が記されている。最後に名があるのが、曲阜で、彼は本名梶曲阜、照顔齋曲阜の号があり、幕末の伊丹俳壇の指導者とされている。鬼貫に対する敬慕が深く、嘉永元年（1848年）には「奥の細道」を訪ねる旅にも出ている。その彼が、仲間の俳人を募って、芭蕉百五十年忌に、この神社にこの碑を建立したとされているものである。神社にはもう一つ、「扇にて酒くむかけやちる桜」という、「笈の小文」にある吉野で詠まれた句を刻んだ碑もあるが、こちらの方は、芭蕉翁三百回忌を記念して、西宮俳句協会が建立している。なぜ、この句が碑に刻まれているかの詳細は分からないが、西宮は灘五郷の一つであり酒との関係が深いことから、選ばれたのではないかと考えられている。

2番の長池公園の碑であるが、現在長池公園と呼ばれているところにある池は、もとは古池と呼ばれ地名としても用いられていた。刀研ぎを生業としてい

た津田布蟬が俳諧の道に入り、芭蕉に心酔する中で、芭蕉の古池の句の古池が、自身の住む古池という地名と同じことを喜び、天保六年自身の四十二の祝いとして、この句碑を建てたものである。自身の出身地の名が芭蕉の句に読まれている（事実でなくとも）ことを、そこまで誇らしく思って句碑を建てた、布蟬の思いを微笑ましくまた尊く思う。

3番の碑は、芭蕉由来の養を埋めて、養塚として建てられたものである。「芭蕉句碑全国総覧」では、句碑の紹介はないが、お寺に行くとその養塚の隣に「名月や抱く雲は志まひ」と刻まれた句碑がある。芭蕉が北陸路を旅した時、加賀の国の門人立花北枝が新しい養と笠を贈った。芭蕉は須磨・明石を訪ねた時、この養と笠を持って訪れ、これらを大阪で病没する時に、門弟の広瀬惟然に与える。また広瀬は、自身が没する時に、姫路の門弟の井上千山に譲り、千山はこれを寒瓜に伝え寒瓜は姫路の増位山随願寺念仏堂裏の太子谷に風羅堂を建て、芭蕉の木像を祭るとともに、遺品を守ってきた。加古川の俳人松岡青羅は千山から養のこぼれを譲り受け、これを生野行脚の際に門弟の青々庵竹也に与え、これをもらった竹也が寛政八年（1796年）門人たちの協力を得て、来迎時の庭に建てたのが、この養塚である。朝来市教育委員会の説明板によると、こうした養塚は全国に四か所しかなく、非常に貴重なものだということである。ただ、句碑については残念ながらその由来等はまだ分からない。

4番の句碑は、「芭蕉句碑全国総覧」のリストにはない。私が豊岡を訪ねた時に偶然見つけたものである。JR豊岡駅にある市の観光案内所で聞いても、なぜ市役所前にこの碑が立っているのか分からないということであったが、色々聞いていくと、但馬は、「書」が盛んな土地柄であり、近年著名な書家の字を刻んだ石碑が、各所に置かれるようになり、竹野出身の近代書家として名高い、仲田光成氏についても、その書を残す碑を建てることになった。そして、その書を表す題材として、芭蕉の句が選ばれたという事のようなのである。

その他の地域の芭蕉句碑（写真）



西宮神社
芭蕉と鬼貫の句碑



（背面）左端が曲阜の
句と名



西宮神社（西宮俳句協
会設立の句碑）



相生市 長池公園



朝来市生野町
来迎時



豊岡市 旧庁舎前

第2節 今後の研究について

兵庫県内の芭蕉句碑は、挙げられている数だけでも相当多く、大学の長期休暇ごとに頑張って尋ねたつもりであるが、まだまだその全てをといるところまでは行っていない。また、前節でも紹介したように、その由来についてもかなりユニークなものがまだ隠されており、興味が尽きないものである。また、リストには挙がっていないもので、近年建てられるものも出ており、そうしたものを逐一当たって見てみたいと思っている。当面は但馬地区の残りの句碑と阪神間のそれを調べてみたいと考えている。

私がこうしたことをしていることを知って、情報提供をしてくれる人もあり（尼崎にもリストにない句碑等があることが分かっている）、リストも増えている。しかし、真面目にコツコツと調べることによって、ここ2、3年のうちに分かっているものについては、何とか調査済みにまでもって行けるのではと思っている。

幸い来春以降、時間的にかなり余裕ができるはずなので、計画実現の見通しは明るいものと期待している。

おわりに

7年ほど前に、「奥の細道」を歩いた時に、行く先々で芭蕉句碑などがあるのであれば見てみたいと思い、参考にしたのが「芭蕉句碑全国総覧—S.Tanaka's homepage」であった。当初は7～8か月で回るつもりが、1年半かかって細道を歩き終わると、さて、県内の句碑はどうなっているのかと気になりだした。須磨・明石にはそれなりにあるだろうとは思っていたが、実際にそれを見たことがなかったので、少し時間ができたときに、リストに挙げられた句碑などを、近くの所から見てみることにした。すると、身近なところでありながら見過ごしてきた碑がいかに多いことか、またその由来が様々で、それを調べていくことが、なんと面白いことかということに気づかされた。また、俳聖といわれる芭蕉の影響力がいかに甚大であるかということも思い知らされたのである。

元気で歩けるのは何時までかと思いながら、いま私は山陽道と山陰道を辿って、2コースで山口の下関までの道を歩く旅を続けている。こうした道々でも芭蕉の句碑を辿ることによって、残された自身の人生を、より豊かに夢に満ちたものにしたいと思っている。